

詩 追憶のカイロ（9）

とよださなえ

カイロで過ごした経験のある読者のなかには、とよださんの詩が、ほのぼのとして暖かく、懐かしいカイロの情景を思い出させてくれると、喜んでくださり、次回を待っている方々もいて、とてもうれしく思います。

この詩集は、NHK記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』（2019年8月出版）から、作者の承諾を得て紹介するものです。

とよださんの今月の掲載詩は短編で、「花の名前」と「カイロの水」の2編です。日本の明治時代に似ているかもしれません、ある程度の収入のある家庭では子守や料理人を雇うことが一般化していた当時のカイロでは珍しくないことなのですが、家庭内の使用人との意思の疎通にも神経を使うことは日常茶飯事でもあつたのです。また家庭内のライフラインもいきなり停まることが多く、幼い子供たちを伴っている場合は、辛い思いをすることも日常の風景でした。とよださんはこんな時、優しい気持ちで周囲を包んでいるようです。（塩尻和子）

花の名前

子守のファトマは字が読めず
アラビア語だけを話した
大女で 勝気で
女中仲間のボスであった
知らないという言葉も嫌いだった

そのファトマに
マーガレットの花を指して
“何って名前？”とたずねた
“花”と答えた
“花というアラビア語でなくて
花の名前を教えて！”
と私が下手なアラビア語をたたみかけた
“白い花”という答え
“色ではなくて花の名前をきいているの”
ファトマは澄まして答えた
“花”

ラクダについての単語は
何千もあるというのに
ファトマには
花は花でしかなかった

カイロの水

誰がいるわけでもないのに
五歳の亮介が
小さな手で
私の耳をひっぱり
フワフワな息をはきかけながら
『リョウチャンがウンコをしたら
お水で流してくれる？』
という内緒話
十日も断水が続き
エレベーターも故障ばかりで
七階まで運ぶ水は
貴重な時だった
『大丈夫ヨ』とうなずくと
ニッコリして
私の膝によじのぼり
『ママ アリガトウ』といった
欲しがっていたものをもらった
どの時よりも
良いアリガトウだった

フラッシュ一回分の水